

熟塾公開講座 ～ 緒方洪庵先生生誕
200年記念講座 第5弾 ～



緒方洪庵と

大坂の除痘館

講師：除痘館記念資料室専門委員 古西義麿氏

日時：2010年5月8日(土)
午後2時～4時

会場：除痘館記念資料室

大阪市中央区今橋3丁目2-17

緒方ビル4階 TEL 06(6231)3257

開館時間：午前10時～午後4時

(土曜日の利用は午前中のみ)

参観料： 無料

休日：日曜日・祝日・年末年始

江戸末期に天然痘(痘瘡)予防普及する活動の拠点となったのが、緒方洪庵を核とする大坂の「除痘館」。その跡地に建つ緒方ビル4階の「除痘館資料室」で『大坂医師番付集成』(思文閣)『緒方洪庵と大坂の除痘館』(東方出版)の著者で専門委員の古西義麿氏から展示物を拝見しながら、洪庵がどのように当時恐れられた天然痘から人々を救おうと活動し、その輪を広げていったのかをご紹介いただきました。



天然痘：1796年5月14日英国のジェンナーが天然痘の予防のために種痘を初めて行いました。今から200年以上前のことです。天然痘は「痘瘡(ほうそう)」とも呼ばれ、種痘前までは、必ず誰かが発病し、死亡率が高い病気として世界中で流行していました。死に至らなくても顔、体にひどい痘跡(あばた)を残すためとても恐れられていた伝染病でした。(エジプトのミイラにもこの天然痘に感染した痘跡がみられた。つまり、古い昔から人類を苦しめてきた伝染病といえます。)

講義概要



8歳の時生まれ故郷・岡山の足守で兄熊之助と共に痘瘡にかかったことがある緒方洪庵。適塾を開設して十一年後に、近所の医師で友人であった日野葛民の京都にいる兄の所に福井藩へオランダの植民地であったインドネシアから輸入された天然痘予防のワクチン(乾燥したカサブタ)が届いたという知らせを聞き、大坂での受け入れを準備する。

中国の人痘種痘法やトルコ式人痘種痘法よりも安全なイギリスのジェンナーが1796年に発見した天然痘予防の「牛痘種痘法」を発見してから53年かかって大阪にワクチンが持ち込まれることになる。

接種する場所の借り受けは友人の薬種商大和屋喜兵衛に依頼。ボランティアで接種・検診に協力してくれる大阪で種痘に関心のある医師を集め、各地の適塾の門人・知人・友人を募る。最初の募集で堺・兵庫・京都・伊丹・高槻・尼崎・大和の今井や五条の医師たちが分苗の希望を申し出る。当初は接種する人が多かったが、半年も過ぎる頃から牛の菌を人間に接種して大丈夫なのかという風評が広がり幾度か絶苗の危機を迎える。接種開始8年後安政2～3年に天然痘が流行した中でも接種を受けていた人々が感染しなかったことでようやく認知され接種を受けにくる人が増加。安政5年には幕府から大坂除痘館が「官許」第一号の認定を受け、二年後に江戸のお玉が池種痘所が「官許」を得る。人々が押し掛けたので古手町の接種所(今の美々卯本店)が手狭になり、現在の緒方ビルがある今橋3丁目に移転。20年間にわたり除痘館を支えたのは立ち上げに奔走した緒方洪庵を初め25名の医師と7名の協力者による。更に大坂の除痘館から分与された分苗所は、東は江戸から西は長崎まで186箇所広がる。緒方洪庵は病にある人々を救おうと奔走しただけでなく、大阪除痘館設立により大阪だけでなく

分苗し接種方法から検診までを伝授し、江戸時代において大坂で予防医学を実践し、日本各地で多くの人々を天然痘感染から守る偉業を成し得た。そして、1980年（昭和55年）WHOに、世界の天然痘根絶を宣言。

記念室内で古西氏を囲んで写真をとりました。



受講後有志で、古手町の除痘所跡を経由して、1828年に緒方洪庵が17歳で入門した中天遊が開いた「思々斎塾」跡（京町堀2丁目）を目指し「花乃井公園」まで散策し、記念写真を撮影しました。



中天遊：中環（なかたまき）別号思々斎。天明2（1782）年、丹後の儒医上田河陽の子に生まれ、京都に育ち、母教戒の入り婿となり「中」氏を継いだ。天遊23歳の時、志を立て江戸に遊学、古賀精里について儒学を修め、大槻玄沢に蘭方医学を学んだ。

江戸遊学1年にして京都に帰る。更に長崎に遊学して再び京都に帰り、大槻玄沢門で先輩の海上髓（うながみずいおう、もと稲村三伯）の塾に学んだ。学ぶこと4年、師の髓は54歳で没した。天遊は、恩師の娘さだを妻として西ノ宮に移住し医を開業した。

ところが天遊は読書にふけているばかりで、およそ生計を維持する役には立たないことを思い、

知らされたさだは父親譲りの医術を里人に施して生計を維持する。天遊とさだにはつぎのような逸話が残されている。

ある日の夕方、さだが往診先から帰ると、天遊は食事もとらずに本を読んでいた。なぜ先に食事をしなかったのかとさだが問うと、天遊はお前が早く帰って食事の用意をしないからだと答えた。

またある日、さだが夕方帰宅すると、明かりもつけずに窓から身を乗り出すようにして外のあかりで読書していた。なぜ燈火をつけないのかと問うと、おまえが早く帰ってあかりをつけないからだと天遊は答えた。万事このようなありさまであったが夫婦仲は良かった。

さだの努力で多少の蓄財もできたので、夫婦相談の上、文化14年（1817）大阪に出て、医業を開いた。天遊35歳のときであった。まもなく京町堀千秋橋北の坂本町に移った。近くの石津町に蘭医齊藤方策の藍塾があり、互に行き来する親しい間柄になる。

天遊は『引律』『天学一步』『算学一步』などの物理・天文・数学の学術書も著述している。また『視学一步』は目の光学に関する論文である。

大阪では天遊も医業に従事したようで、夫婦共稼ぎで診療に勤める一方、思々斎塾という蘭学塾をおこして西洋医学を教えた。またエレキテルの研究で知られる橋本宗吉の蘭学塾「糸漢堂」にも出入りした。大塩平八郎によるキリシタン摘発の災禍を恐れて宗吉をたずねるものが絶えても天遊は変わらず宗吉の元を訪れた。

文政9（1826）年7月、緒方洪庵17歳のとき、思々斎塾に入門する。天遊はすでに44歳になっていた。洪庵は天遊のもとで4年間学び、翻訳書をことごとく読破した。洪庵の才智を見抜いた天遊は、江戸の坪井信道のもとで原書を通し西洋医学を学ぶように勧め、洪庵は江戸に旅立った。天保6（1835）年3月26日、天遊は53歳で他界した。駆け付けた緒方洪庵は師の恩に報いるために思々斎塾で教鞭をとり、さらに天遊の遺児耕介を連れて長崎に下り医学の修業をさせて援助した。

参加者：塾生：秋山建人・浅井憲治・井上章・大森史子・柄谷宗子・北原祥三・下野譲・高木勇一郎・鳥飼史郎・中島一・浜田真弓・原田彰子・米川俊信
一般：徳岡葵・彦坂真一郎（敬称略）